

【資料2】

2018年度 授業評価(授業アンケート)結果報告

1. 授業評価実施の経緯

- 2003～2006 北辰図書によるアンケートを導入、4年間継続
- 2007～2008 全教員による手作りアンケート方式実施
- 2009～2013 再び北辰図書によるアンケートに戻して、以後5年間継続
- 2014～2018 代々木ゼミナール教育総合研究所に変更、次年度も継続の予定

2. 授業評価の特徴

- 質問項目の内容・意図が明確であり、生徒が解答しやすく、また教員の立場からも改善につなげやすい。
- 発送から3週間程度と、比較的短期間で解析結果が送付される。
- 解析後に講師が派遣されて、全体の場で評価の読取り方や今後の改善方法、授業力向上策などが指摘され、事後の授業づくりの参考になる。実施以後も、授業改善・生徒指導の提言を紹介してくれる。

3. 授業評価の質問一覧

番号	項目	質問内容
1	話し方	先生の話し方は聞き取りやすい。
2	説明と確認	説明はわかりやすく工夫され、理解を確認しながら授業が進められている。
3	関係	先生は熱意を持って授業を行い、生徒の状況をよく理解して丁寧に応じてくれる。
4	ガイダンス	授業の目的や取り組み方について、先生は事前に十分な説明をしてくれる。
5	活用(教壇系)	授業や家庭での課題を通じて、授業で学んだことを使ってみる機会がある。
	助言(実技系)	評価の観点が予め示され、それに基づく改善のための助言が適宜行われている。
6	学習効果	この授業を受けて、学力や技能の向上を実感できた。
7	興味関心	授業を受けることで、この科目に対する興味や関心が高まった。
8	進み方	授業の進み方、(授業で扱う分量)はあなたにとってどうですか。
9	難易度	教材や課題の難易度はあなたにとってどうですか。
10	意識姿勢	この科目は、得意ですか、苦手ですか。

- 今年度の変更点として⑤「活用」の説明文を「宿題・課題を通じて、授業で学んだことを使ってみる機会がある」から「授業や家庭での課題を通じて、授業で学んだことを使ってみる機会がある」に変更した。これは昨年までの表現では、宿題・課題を出さずに毎回の復習を徹底したり、授業内に復習・定着などのまとめ時間を設定したりする授業が適切に評価されないなどの問題点への対応である。
- ①～⑦の質問項目に関しては、A「非常によくあてはまる」、B「よく当てはまる」、C「どちらかといえば当てはまる」、D「あまり当てはまらない」、E「当てはまらない」の5段階で評価する。
- 昨年度、質問項目を変更して新たに⑦「興味関心」を加えたが、自身の授業づくりがどのように生徒に受けとめられているかを確認するうえで参考となった。よって本年度もこの項目を継承し、⑤の文面を除き他項目も含めて本年度は質問事項の変更は行わなかった。
- 上記の7項目はA=10、B=8…、E=2という得点がつけられ、最終的に100点満点に換算した得点率で示される。高いほうが、高評価となる。
- ⑧は、A「速すぎる」、B「やや速い」、C「ちょうどよい」、D「やや遅い」、E「遅すぎる」の5段階で評価する。
- ⑨は、A「難しすぎる」、B「やや難しい」、C「ちょうどよい」、D「やや易しい」、E「易しすぎる」の5段階で評価する。
- ⑩は、A「得意」、B「どちらかといえば得意」、D「どちらかといえば苦手」、E「苦手」の4段階で評価、得意方向か苦手方向かを明確に示す。
- ⑧～⑩は、A=+10、B=+5、C=0、D=-5、E=-10の平均数値で示される。0が理想的ではなく、若干「速い」・「難しい」によった+1～2程度が理想的とされる。
- 生徒は上記アンケート項目以外にも、教員に対する記名式でコメントを記入することができる。コメントは生徒から回収後に、担任教員がアンケートとは切り離して、直接担当教員に手渡している。
- アンケートは、例年同様に7月のWDやLHR時に実施した。

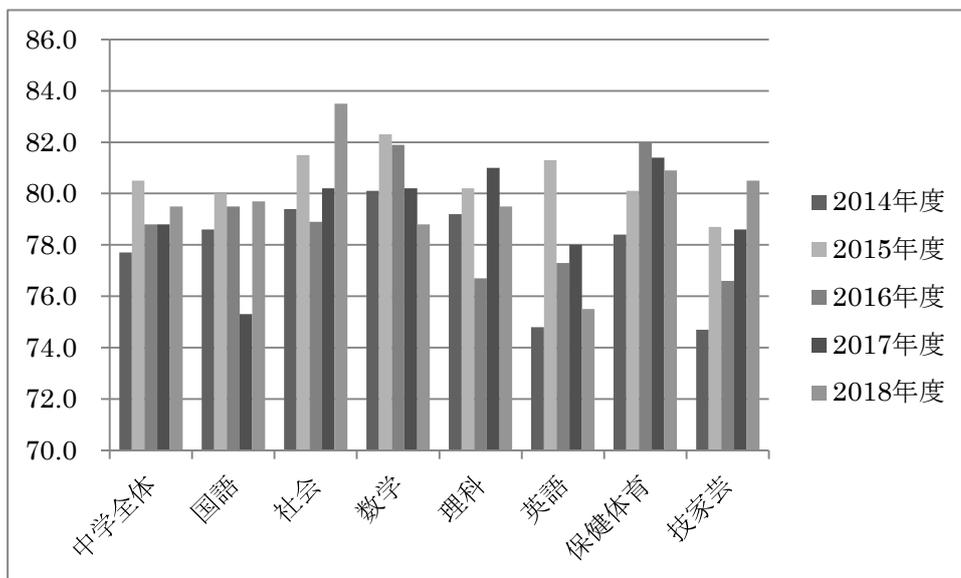
4、アンケート実施後の対応

- 今年度は、8月23日（木）に授業評価検討会を実施した。
- 講師より全体概評、評価点、課題、改善方法などが紹介され、その後質疑応答を実施して内容を深めた。
- この後、午前中は教科、午後は担当学年で会合を開く。午前中は各自の結果を報告しあい、そのなかで教科共通の課題や長所などを確認し、今後の授業の改善内容・方法などを討議し、必要によっては以後の教科会でも継続審議を行った。
- 午後は、学年や各クラスの評価点・課題を基に、今後の授業改善を考えた。
- これらの討議を参考にして、自分の課題克服を中心に改善シートを副校長に提出した。

- 授業見学やその後の教科会での話し合いなども含めて、各自・各教科で改善を重ねた。
- 2月中・下旬に、最低でも自分が課題を抱えている1クラス以上で授業アンケートを行い、改善状況を次回教科会で報告し、成果・課題などを再度確認する。

5、教科別の総合評価

〈中学〉



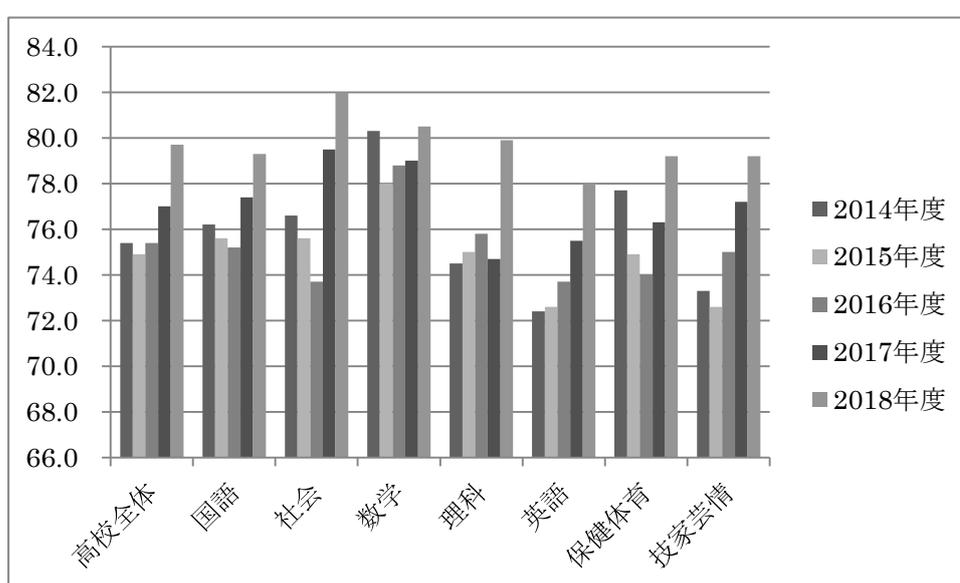
	中学全体	国語	社会	数学	理科	英語	保健体育	技家芸
2014年度	77.7	78.6	79.4	80.1	79.2	74.8	78.4	74.7
2015年度	80.5	80.0	81.5	82.3	80.2	81.3	80.1	78.7
2016年度	78.8	79.5	78.9	81.9	76.7	77.3	82.0	76.6
2017年度	78.8	75.3	80.2	80.2	81.0	78.0	81.4	78.6
2018年度	79.5	79.7	83.5	78.8	79.5	75.5	80.9	80.5

- 昨年度より質問項目を変更し、従来の「板書」・「行動」に改めて⑦「興味関心」を設定したが、中学校全体においては、この質問間で5ポイントほど平均が減少したため、昨年度の全体の平均は結果として横ばいであった。本年度は後掲のように、「興味関心」において改善がみられたため、中学校全体の平均でも、やや向上がみられた。
- 昨年4月に中学2・3年生の教室にも短焦点プロジェクター付ホワイトボードのワイドを設置したことで、中学3学年全教室にワイドが設置された。また、昨年度までは黒板を使用していたが、これを機に中学1年生も含めて全教室をホワイトボードに替えたことにより画像をより鮮明に表示することができた。評価をあげた教科のなかには、授業において映像・画像をはじめとしてプロジェクターを効果的に活用した教員が所属する教科も

含まれている。また評価を上げないまでも、各教科においてワイドの効果的な活用に関して努力をしているが、項目ごとの部分で説明するが、それがかならずしも⑥「学習効果」の向上には至っていないという問題点も存在している。

- 昨年度評価を落とした国語科は、新たな学習内容・入試制度にも対応すべく思考力・判断力・表現力を重視し、また生徒がお互いに学び合う授業内容を以積極的に取り入れたものの、その内容を生徒に充分理解されていなかったため、戸惑いもあったが、今年度は昨年度の内容を精選して実践したことにより、数値を一昨年度レベルまで改善することに成功した。

〈高校〉



	高校全体	国語	社会	数学	理科	英語	保健体育	技家芸情
2014年度	75.4	76.2	76.6	80.3	74.5	72.4	77.7	73.3
2015年度	74.9	75.6	75.6	78.0	75.0	72.6	74.9	72.6
2016年度	75.4	75.2	73.7	78.8	75.8	73.7	74.0	75.0
2017年度	77.0	77.4	79.5	79.0	74.7	75.5	76.3	77.2
2018年度	79.7	79.3	82.0	80.5	79.9	78.0	79.2	79.2

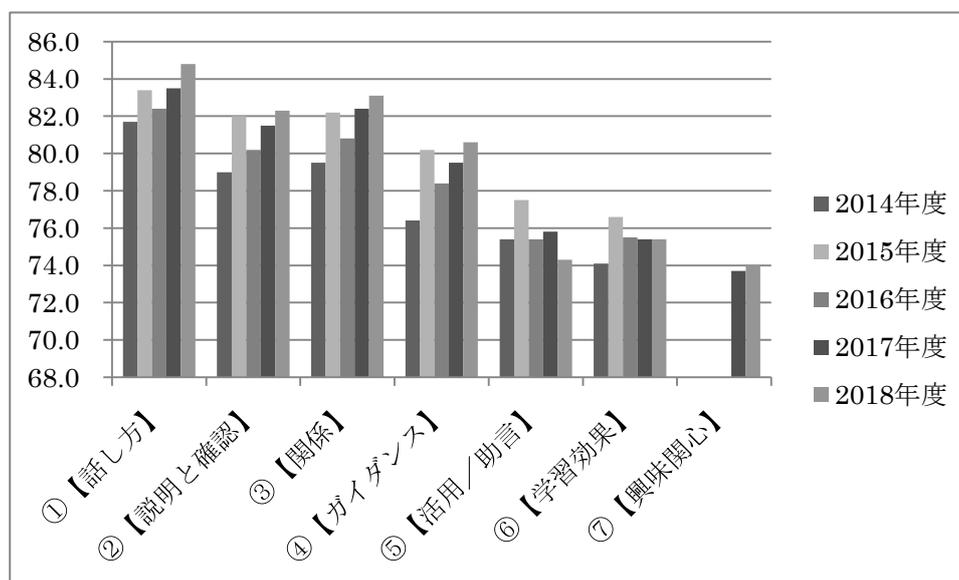
- 高校生は中学生に比べて授業への要求度も高いため、全体の平均値も低めになりがちで例年 75 ポイント前後であったが、今年度は2年連続で上昇し、現業者に変更後、若干ではあるものの初めて中学校の数値を上回った。
- 昨年度大きく数値を向上させた社会科は本年度もさらに改善を果たした。④「ガイダンス」と⑥「学習効果」の相関性が強く、授業の目的や取組に関する説明を生徒が理解し、そ

れに基づいて授業や家庭学習に取り組んだ結果、「わかる」ことを実感している生徒が多いことに起因していると思われる。

- 大きく改善をはかった理科は、最初の7項目においてすべて昨年の数値を上回った。昨年度においても、③「関係」・④「ガイダンス」などの項目では一昨年度の数値を上回っていた。また⑧「授業の進み方」・⑨「難易度」は昨年度と数値がほとんど変わっていない。すなわち、生徒に適した授業レベルや進度が定着したことにより、生徒も授業に集中しやすい環境が生まれ、⑥「学習効果」などの項目にも好影響が生じて、全体の数値も高まったと考えられる。これは理科においては、とくに③「関係」と⑥「学習関係」の相関が強いことからもうかがえることである。
- 今年度は昨年度に比べ、各教科軒並み⑩「意識姿勢」が低下している。すなわち、各教科に対して苦手意識が強いということである。本来であれば苦手な教科があっても、得意な教科もみられるのであるが、今回は社会科・体育科・芸術系を除いて、⑩「意識姿勢」がほぼ横ばいか低下していた。授業の理解度からも影響していると推測されるが、今年度2回目のアンケートでの結果も踏まえて、事後の対策を検討したい。

6、質問項目ごとの評価

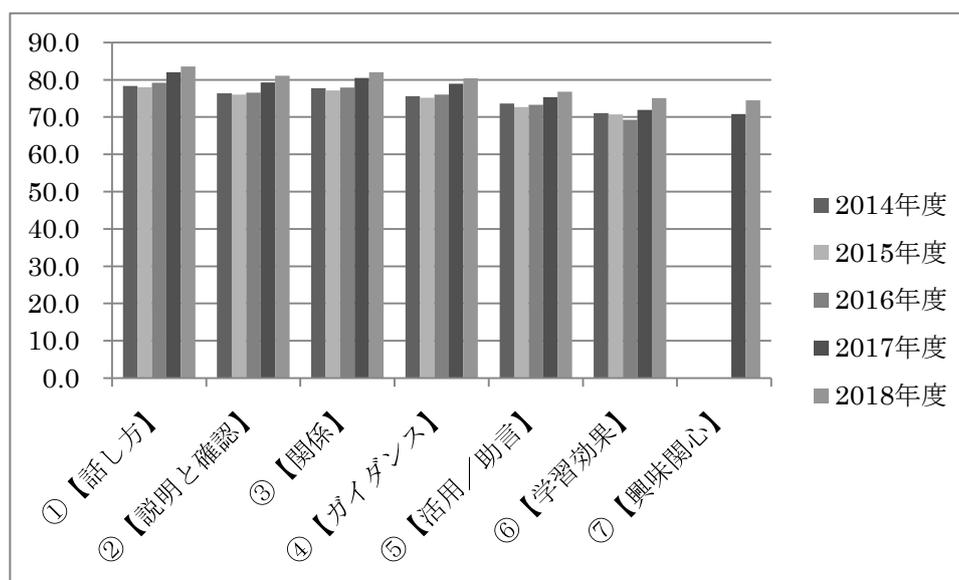
〈中学〉



	①【話し方】	②【説明と確認】	③【関係】	④【ガイダンス】	⑤【活用／助言】	⑥【学習効果】	⑦【興味関心】
2014年度	81.7	79.0	79.5	76.4	75.4	74.1	
2015年度	83.4	82.0	82.2	80.2	77.5	76.6	
2016年度	82.4	80.2	80.8	78.4	75.4	75.5	
2017年度	83.5	81.5	82.4	79.5	75.8	75.4	73.7
2018年度	84.8	82.3	83.1	80.6	74.3	75.4	74.0

- ⑤「活用／助言」のみがポイントを下げているが、あとの項目は横ばいもしくは若干の上昇がみられる。①～④が向上しているということは、生徒に授業の目的を理解させ、そのうえで教員が熱心にかつ生徒の理解度に応じた丁寧な説明をする授業構成がなされていることを示している。すなわち、生徒の立場からすると自分たちがわかりやすい授業を教員が心掛けてくれていると感じているのである。これはワイドの活用など、生徒の理解力を深めるために教員が授業づくりに工夫しているあらわれと推測できる。
- その一方で、⑤「活用／助言」は1.5ポイント低下している。授業自体はわかっている、その復習・確認の機会には恵まれておらず、結果生徒は⑥「学習効果」も実感できないのである。前述した高校ほどではないが、中学校においても⑩「意識姿勢」の数値は低く、0.1であることも、上記⑤・⑥の数値に連動していると考えられる。

〈高校〉

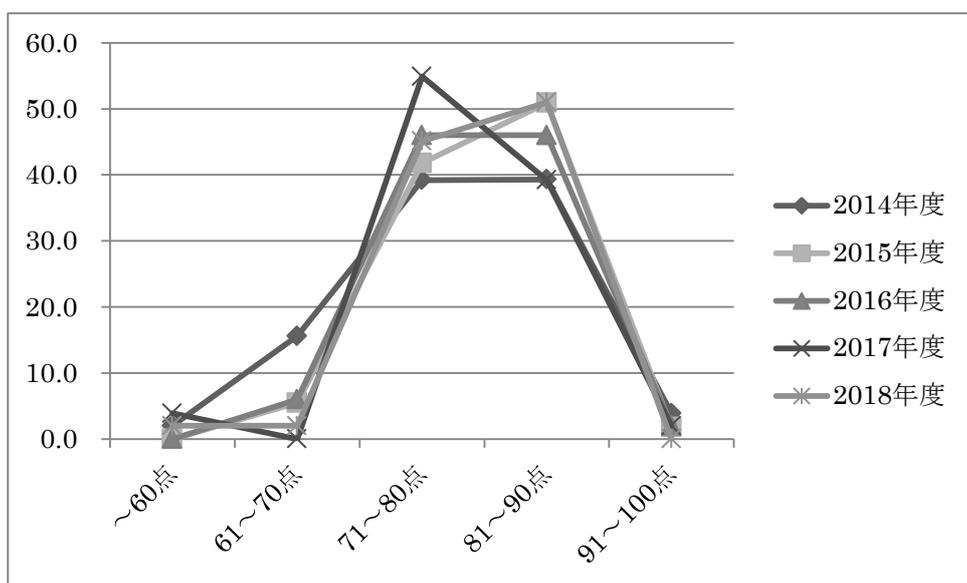


	①【話し方】	②【説明と確認】	③【関係】	④【ガイダンス】	⑤【活用／助言】	⑥【学習効果】	⑦【興味関心】
2014年度	78.3	76.4	77.7	75.6	73.6	71.1	
2015年度	78.0	76.0	77.1	75.2	72.7	70.7	
2016年度	79.2	76.5	77.9	76.0	73.3	69.3	
2017年度	82.0	79.3	80.5	78.9	75.3	71.9	70.8
2018年度	83.6	81.1	82.0	80.4	76.8	75.1	74.5

- 高校は全体平均が向上したことを前述したが、項目ごとにおいてもすべてポイントが上昇している。全項目で1ポイント以上の向上がみられるが、⑦「興味関心」が3.7、⑥「学習効果」が3.2と伸びが大きい。授業内容が向上した結果、その授業への興味が高まり、理解度も高まっていることが示されている。
- 一方で、⑩「意識姿勢」は-0.1と低い数値で、このような矛盾した結果になっている原因の解明に迫られているものの、現状では問題を解決するに至っていない。

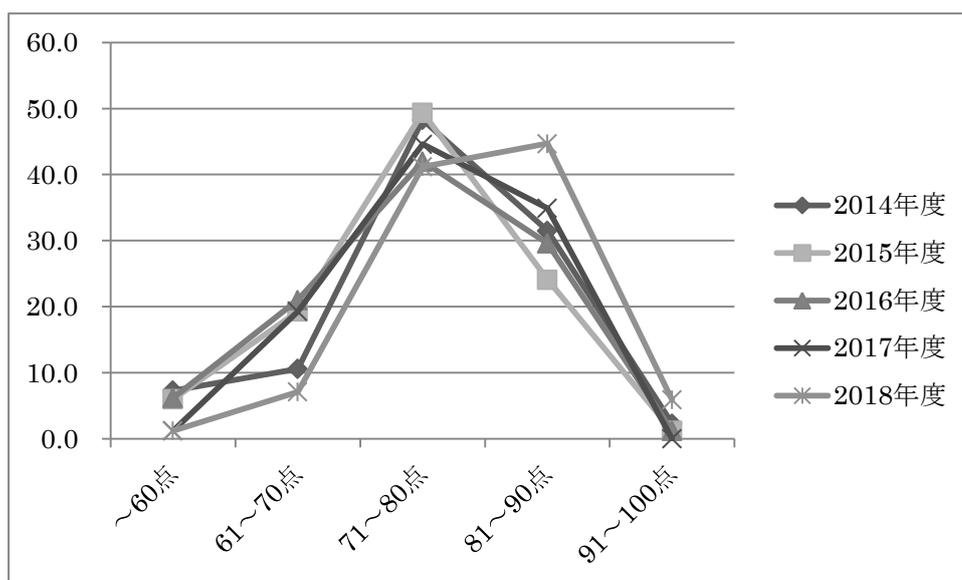
7、教員の評価分布

〈中学〉



	~60点	61~70点	71~80点	81~90点	91~100点
2014年度	2.0	15.6	39.2	39.3	3.9
2015年度	0.0	5.5	41.8	50.9	1.8
2016年度	0.0	6.0	46.0	46.0	2.0
2017年度	3.9	0.0	54.9	39.2	2.0
2018年度	2.0	2.0	45.1	51.0	0.0

〈高校〉



	~60点	61~70点	71~80点	81~90点	91~100点
2014年度	7.3	10.6	48.3	31.5	2.3
2015年度	6.0	19.3	49.4	24.1	1.2
2016年度	6.2	21.0	42.0	29.6	1.2
2017年度	1.2	19.3	44.6	34.9	0.0
2018年度	1.2	7.1	41.2	44.7	5.9

- 昨年度は、中学校・高校ともに70%台にピークがあったが、今年は授業力向上につとめた教員が増加し、80%台にピークが来ている。
- また高校では90%台の教員も約6%と、最高に近い評価を得た教員も存在した。
- 8月の授業評価の結果を踏まえて、教科会で共有がはかれる一方で、例年と同様に教員間で定期的に授業指導の時間をもたれたり、若手の教員を中心に授業見学が行われたりするなど、授業力向上の試みは今後も継続されている。
- 一方で、国語科などにみられるように、新学力観に基いた授業も徐々に定着し、それが生徒にも受け入れ始めていることも今回の結果からみえてきている。今後も思考力・判断力・表現力を向上させる主体的・協業的な授業づくりに対して、積極的な導入を継続していきたい。

以上